

Title	技術的失業の否定 : Machinery, Employment, and Purchasing Power, National Industrial Conference Board Studies, No.218 R. 2nd. Rev. Ed. 1936.
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.8 (1936. 8) ,p.1221(129)- 1228(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19360801-0129
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360801-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此の章は、かゝる略述に見る様に、都市計畫論的な立場、更に都市進化論的な立場を以つて述べられた一章である。

以上、紹介が永きに過ぎた。結論として、本書の全體について批評を加へて見よう。前述した所によつて分る様に、本書は決して副題の示す様に「社會學的」なものとは必ずしも云へない。科學的な體系的なものではない。一方には立法、行政上の問題即ち政策が論ぜられ、批判され、他方には、スラムの都市社會的構成、スラム住民の心理學的分析などが行はれてゐる。前者に屬するものは第一、第四、第五の三章、後者に屬するものは第二、第三、第六の三章である。又其の敘述も決して學術的に嚴正ではない。比較的自由に書き流してある。又それだけ面白く讀める、不良住宅問題の解決を當面の關心に置いて、スラムの何たるや、スラム住民の性質等を知る爲めには好箇の書物である。而して著者の見聞による敘述は豊富にして詳細である。且つ、専門家が利用して恐らく暗示的提案的なものを見出す所少くはあるまい。故に、唯單に面白く讀む者に對してのみならず、研究者にとつても、一顧に價するものであらう。

技術的失業の否定

— Machinery, Employment, and Purchasing Power, National Industrial Conference Board Studies, No. 218 R. 2nd. Rev. Ed. 1936. —

藤 林 敬 三

私は本誌前號に於いて、ウラジミール・ウオイティンスキーの著「失業の三つの原因」(一九三五年)を紹介し、特に技術上の進歩が失業の原因として持つ相對的意義を確證するために案出せられたる彼の統計的方法と、それに基づく彼の現實的研究との概要を傳へて置いた。そしてその際アメリカに於ける失業問題の解釋に就いて、彼の結論の一部分は既にこれを紹介して置いたのであるが、便宜上此處に再び彼の結論を引用すれば凡そ次ぎの如くである。

「人間の勞働力は一九二〇年から一九二七年に渡つてアメリカの工業生産から機械に依つて排除せられた。技術の進歩に依る人間勞働力の排除が新生産部門の成立、或はまた生産の全範圍の擴大に依つて充分償はれてゐる場合には、技術的失業の問題は存しない。またその補償が單に一時的に妨げられてゐるに過ぎない場合には、その障害は更らに前進せんがために國民が負擔しなければならない費用であると見做され得る。しかし大戦後のアメリカの

工業生産の發展に就いて見れば、右の如き事實と相反して、景氣の最上の時期に於いて尙ほ補償が行はれず、生産の擴大は附加的勞働力を吸収してはゐない。

かくの如くウオイト・インスキーは一九二〇年代のアメリカの失業問題に關して、その原因を主として技術の進歩に求めてゐるのである。そして一九二九年の恐慌勃發以來の莫大な失業者の存在は云ふまでもなく生産の縮少、従つて専ら經濟的原因に由來するものであると見做されてゐる。

かくウオイト・インスキーが一九二〇年代のアメリカに専ら技術的失業を認めやうとするのと、全く反對に、技術的失業の意義を殆んど全くこれを否定する許りではなく、更らに積極的に生産技術の進歩に關して極めて樂觀的な、そしてウオイト・インスキーと同様に諸種の統計的資料を基礎とする現實的な一研究が存在する。しかもそれは從來屢々技術的失業が問題とせられて來てゐるアメリカ本國に於いて行はれてたものである。私が此處に先きのウオイト・インスキーの見解と對照して、讀者の興味に訴へやうとする National Industrial Conference Board の手に依りて行はれた『機械、雇用、購買力』(一九三六年)の研究がこれである。(註)

註、本研究は既に昨年十月に公刊せられたものであるが、此處に紹介のために私の利用したものは今年に入つて公刊せられたその第二版である。そしてこの第二版は特に非自發的失業—技術的失業はこの内に含まる—に關する、より正確にして、また一層包括的な資料を以つて準備せられたものである。

二

本書の目的とする所はアメリカに於ける失業、雇用、生産及び勞働階級の購買力の消長に對する機械の一般的關係を現實に確證しやうとするにある。本書は章を分つて、『機械と失業』、『雇用と生産』、『工業生産に於ける機械化、

雇用及び生産』、『機械、所得及び購買力』、『近時の恐慌期間に於ける發展とその將來の見透し』の五とし、その研究の全體が事實に關して最も信頼し得る諸種の統計的資料に基礎づけられて居り、従つてそれは先きの目的に沿ふ現實事實の解釋を本體とするものである。しかし私は此處では單に本書の結論としての現實事實の解釋、特に技術的失業の問題を中心としてウオイト・インスキーの見解と對照して興味ある部分を主として紹介して行き度いと思ふ。

先づ本書第一章の結論に従へば、正常な經濟的發展の期間に於ける失業の大部分は老年、疾病、負傷、同盟罷工、事業の季節的變動に因るものであり、また自發的に他に職を求めんとして從來の職業を離れたるもの、更らに技術上の改良のために解雇せられたるものが失業者中に數へられることは素よりである。そしてこの最後の所謂技術的失業に就いて見れば、その一定數が常に存するものであることは否定し得ない所である。しかしその技術的失業の程度は從來明確にせられ得てはゐない。唯だ一九三〇年に行はれた聯邦失業調査に依れば、——それは失業の原因を十五に分つてゐる——機械の採用に依る失業者の發生は僅かに全失業者の〇・三パーセントに過ぎない。勿論この失業調査に於ける失業原因の分類探及が必ずしも正確であり、信頼し得るに足るものであるとは見做されてゐるのではないが、しかも本書に於いては技術的失業として失業者自身に依つて報告せられた右の僅小なる割合をば、甚だ重要な意義を有するものであると見做してゐる。かくて結論の第一は從來の經濟的發展、機械化の進展の期間に於いて機械が失業者増大の主たる原因ではないといふ點に於いて、技術的失業の理論が否定せられてゐる。更らにこの結論と共に、他方では W. C. Mitchell (Business Cycles, 1927) の景氣變動の諸要因に關する見解を援用し、且つ一九一九年から一九二九年に至る期間に事實資本財の生産過剰が存しなかつたといふ事情を確定すること

に依つて、恐慌の、従つてその結果としての失業者の増大の主たる原因が機械に存するのではないと見られてゐる。

この第一の結論に依つて、技術上の進歩が失業の直接並に間接の原因を構成すと做す見解が明かに否定せられる。私は吾々の興味を中心に觸れる右の結論の批判に先き立つて、第二章以下に於ける本書の研究結果を簡単に摘出して置かう。

便宜上第二章及び第三章の研究結果を總括し、これを概括的に傳ふれば次ぎの如くである。即ち、一八七〇年より一九三〇年に至る、アメリカ産業界に於ける最も急激なる生産技術上の進歩の行はれた期間に、労働人口の増加は全人口増加よりもその割合に於いて一層大である。そしてこの労働人口の増大は必然的に人口の職業構成上の變化を伴つてゐる。即ち、全人口中に占める各種産業上の人口の相對的な割合は、工(及び鑛)業人口の僅かの増加に比して、商業、交通、サービス・インダストリーの方面に於ける人口の著しい増大、従つてこれ等と相對的に農業人口割合の著しい減少といふ事實がこれである。然らばこれ等の變化の基本的理由は何處に存するか。それは機械の改良と新機械の採用にあると見られる。先づ多くの機械は労働節約のために採用せられるのではなくして、寧ろ生産物の品質の向上のために、或は新生産物の生産のために役立つ。この後の意味に於いて技術上の進歩は新生産部門の成立を可能にすることに依りて労働人口、従つて雇用の範圍の擴大に對して重要な意義を持つ。更らにこの新生産部門の發展を含んで、機械の改良は生産能力の増大を可能にし、生産の増大は必然的に商業、運輸(また建築、別に事務的業務)の活動の増大を招來するに至る。そして機械の發展に依る生産可能能力の増大が事實生産の増大、従つてまた労働雇用の増大として現はれ得る理由は、生産物に對する需要が伸縮性に富む限り、機械は生産費を低下し、従つて價格を低下し、また生産物の品質を改良することに依つて市場の擴大が可能であるといふに存す

る。アメリカ産業界に於ける自動車工業の如きはその最適な例である。これと關聯して事實確定せられてゐる所に依ると、技術的に最も發達せる諸産業が著しく労働力を需要し、これに反して機械化の進展の遅々たる諸産業に於ける労働力の吸収は比較的僅少である。

以上本書の第一章から第三章に至る研究の結果から見れば、本書は機械の發展に關して全く技術的失業を否定し、完全に補償説の寧ろ古典的理論を基礎づけるに役立つてゐるといふことが出来る。更らに單にそれ許りではなく、本書の第二章の一部分と第四章の研究の結果は、技術上の發展が一般に労働階級の購買力と生活標準の増進に充分役立つて來てゐることを示さうとし、且つ最後の章に至つては甚だ樂觀的な論調を以つて、次ぎの如き言葉さへ述べられてゐる。「機械は比較的少量の労働を以つて、また比較的短時間の内に吾々に對してより大量の生産を提供して來た。人間の努力に比して生産のこの増大は、それは從來雇用の範圍を減少したのではなく擴張したのであるが、アメリカ國民の經濟的並に社會的厚生に對する二十世紀の最大の貢獻である。そしてこのことが將來ともに持續することが希望さるべきであり、且つそれは合理的に期待され得ることである」と。更らに云ふ。最近時の「失業問題に對する解答は機械利用の制限に存するのではなくて、結局生産の範圍を増大するにあり、そしてそれに依つて國民の購買力を増進し、失業者を完全に吸収するに至らしめるやうにすることである」と。

以上の諸見解を綜合すれば、本書の研究の全體が如何に樂觀的な補償説を新に基礎づけるに役立つてゐるかを、讀者は容易に推知し得られるであらう。

三

技術的失業を否定する以上の見解を少しく検討して見やう。

從來アメリカには充分信頼し得るに足る完全な失業統計は存しない。一九二〇年代の失業に關しては數ヶの推定的統計が作出せられてゐるに過ぎない。そしてその何れの推定に従つても、この時代の失業者數は左程大ではない。——勿論一九二一年と二二年は他の年次に比してその數は著大ではあるが——且つその失業者は各種の産業に大體同じやうな數量に於いて分散してゐる。従つて個々の産業部門から見れば、その各々の持つ失業者は更らに僅小となる。この失業現象が先づ本書に於いては、労働者の疾病、傷害、季節的變動その他の理由に基づくものであると理解せられ、これに反してウオイツキンスキーに於いては、それは技術的失業であると考へられてゐる。然らばそれは如何にしてあるか。ウオイツキンスキーの理解する所に従へば、アメリカに於いては各種労働市場間に障壁が存せず、労働力の移動が特に著大である。彼はこのために建築業に於ける労働力の需供状態の變化を例として擧げてゐるのであるが、吾々も亦この點を認めて然るべきであらう。果して然りとすれば、また彼の云ふやうに、この時代のアメリカの失業は各種産業上に發生したと云ふよりは、寧ろこの期間に新労働力を需要することなく、時に労働者數を減少さへしてゐる工（及び鑛）業に唯一の根源を求むべきものであらう。そして彼は工、鑛業に於ける技術的進歩が相對的に失業者の存在に對して最も重大なる意義を有するものであることを確認することに依つて、この時代の失業を以つて技術的失業であると解釋する。

先づ右の如きウオイツキンスキーの理解の方法が本書に全然欠除してゐることが指摘されなければならないであらう。加之、自ら甚だ不確實であると見做し乍ら、尙ほ一九三〇年の失業調査に於ける失業原因の分類を根據として、技術的失業が全然皆無ではないが、全く採るに足らぬ現状にありと斷定することは吾々の直ちに賛同し得ない所である。しかもまたその失業調査が一九三〇年に入つて行はれたものであり、従つて産業界には既に前年の株式市場

の破綻があり、機械化の速度に對する抑制が多少とも既に存してゐたと推測することが許されるとすれば、尙ほ更ら然りである。

更らに本書に於ける技術的失業の否定はまた次ぎの如き見解に支持せられてゐる。即ち機械の採用は生産費を低下し、従つて價格を低減し、それだけに製品の販賣を刺激する。そしてまたこのことは他方労働階級の購買力の増大といふ事實と相俟つて、益々生産の増大を實現し、従つて労働力の需要を強化する。機械の採用はかくて失業ではなく、労働者の雇用を増大する。しかし生産の増大、従つてまた市場の擴大は單に一國內の購買力の増大といふ事實にのみ對照して樂觀され得る程事情は簡單ではない。即ち今日の事情を以つてすれば、吾々は常に世界經濟的な關聯に於いてこれを再検討することが必要である。特に失業問題の根本的な解決策として機械化の増進に依る生産の擴大が考へられてゐる場合には、このことは更らに必要である。兎角補償説の代辯者に通則である一般的な欠點は、機械の貢獻が普遍化されて意識せられることである。經濟生活は種々の關聯に於いて歴史的に發展する。農業國から工業國への工業化の發展の時代に機械の有してゐた意義が、全くそのまゝ今日及び今後の經濟生活に於いて妥當すると考へることは早計の誹を免れ得ないであらう。

最後に技術的失業の理解に就いて一言して置き度いと思ふ。ウオイツキンスキーは一九二九年以後のアメリカの失業は専ら經濟的な理由、即ち生産の縮少といふ事實に基づくと做し、従つて此處では技術的失業が問題とならないと考へてゐる。勿論この生産の減縮の時代には機械化の發展は著しく阻止せられることは何人もそれを認めねばならない。しかし吾々は此處で一九二九年に至るまでの間に於ける技術的失業の蓄積と、その後恐慌期間に於ける失業とそれとの關聯を考へて見ることが、更らに技術的失業の問題をより深く取り扱う所以ではなからうか。勿論

このことは他方に於いて、吾々が本書に援用せられてゐるが如きミッシェルの景氣變動の諸要因を以つて満足すべきものであるか否かの問題とも關聯する。即ち吾々は更らにより根本的に這般の世界恐慌の原因を探及し、其處に資本主義の現段階に於ける機械化の歴史的意義に就いて再検討を加へる必要があらう。かくして技術的失業の問題は全般的な問題としてよりよく取り上げられることとなる。しかしそれは本書に於いても亦ウオイティンスキーに於いても、同様にやはや吾々の期待し得ない所である。

(昭和十一年七月十一日稿)

Gerhard Colm, Probleme der Finanzsoziologie

(Festgabe für F. Tönnies), 1936.

永田 清

財政學は現在顯著な發展を遂げつゝある。この發展は財政學自體の理論體系の發展であること無論だが、それと同時に、吾々は近時の社會情勢の變化が斯る理論内容の展開を要請したことに着想しなければならぬ。從來の財政學は現下の財政現象に面して破綻するところが多い。この破綻は何等かの理論によつて繕はれねばならぬ。こゝに財政學の新しい擴充が起つて來る。現代の様々な財政理論は、從來の財政學が現下の財政現象の理解に役立たなくなつたときに、この乖離を乗り越えんとして現れたものである。謂はゞ新財政理論は、現象の變化が從來の財政學を現實と離れた擬制の理論につき落したとき、現象の正しき認識「ものそれ自體」への希求となつて現れたものである。かゝる新財政理論の一つの方向として、吾々は「財政社會學」を識つてゐる。一概に財政社會學(Sociologie financière, Finanzsoziologie)と謂つても、そのもつところの理論内容は之を一律に規定することは出來ぬ。極端に謂へば、自ら財政社會學者と稱するもの、また稱せざるものを廣く包括した一聯の財政社會學者達は、寧ろ個別的に考へられねばならぬ程それぞれ特有の理論體系を樹ててゐる。シェフレ、ドニス、ド・グレンエフ、ゴオルド・シャイド、

Gerhard Colm, Probleme der Finanzsoziologie (Festgabe für F. Tönnies), 1936.

一三六 (二二八)